

「東トルキスタンをめぐる歴史--チンギス・ハーンから毛沢東へ」

トルキスタンとはトルコ（チュルク）系の人びとがこの地域の主な住民になってからできた呼称である。パミール高原の東側にある東トルキスタンは東西を走る天山山脈を挟んで、北側の草原遊牧の世界と南側のオアシス農業の世界に分かれた。



トルキスタンの範囲

840年にモンゴル高原北部にあったトルコ系のウイグル（回鶻）国家が滅亡し、一部のウイグル人は天山山脈東部のトルファン地域に移動して「西ウイグル王国」を作り、この地域のトルコ化（移動してきた遊牧民だったトルコ系の人びとは定着または定住化し、トルコ系言語の普及を通じて元の住民を同化）を促した。ほぼ同じ時期にモンゴル高原から多くのトルコ系遊牧集団がパミール高原の西側にも移動し、彼らが現在のキルギス北部で作った「カラ・ハン朝」は、天山南部のカシュガル地域まで支配を広げた。16世紀初頭

まで仏教を信仰した西ウイグル王国に比べ、部族を基礎にできたカラ・ハン朝は政治的に統一性が弱く、

960年にカシュガルを拠点とするサトゥク・ボグラ・ハーンはイスラームに改宗し、その際20万帳（世帯）のトルコ系遊牧民も一緒に改宗したと言われる。ここから中央アジアのトルコ系住民のイスラーム化が始まり、カラ・ハン朝の「聖戦」で天山南部のオアシス住民のトルコ化も迅速に実現した。現在のウイグル人は西ウイグル王国とカラ・ハン朝を由来とするが、カラ・ハン朝に長編叙事詩『幸福になる知恵』（1069年）と百科全書とも言われる『トルコ語大辞典』（1074年）などのトルコ・イスラームの文化遺産が誕生し、ウイグル人の民族的アイデンティティの礎を築いた。



新疆最大のカシュガル・エティカールモスク

統一した民族アイデンティティができたのは、二つの地域がともにモンゴル帝国及びその末裔に統治されてからである。1209年、西ウイグル王国は西トルキスタン・イラン地域にあるホラズム・シャー朝の国境線にまで勢力を拡大してきたモンゴル帝国に服従を表明した。カラ・ハン朝は1212年にホラズム・シャー朝によって滅ぼされたが、ホラズムも1219年にチンギス・ハーンの征西によって解体に追い込まれ、中央アジアはすべてモンゴル帝国の支配下に入った。チンギス・ハーンの死後、中央アジアは次男のチャガタイの私領になったが、1347～48年にチャガタイ・ハン国は東西に分裂し、東トルキスタンは東チャガタイ・ハン国領となった。最初の東チャガタイ・ハンであるトゥグルク・テムルが16万人のモンゴル人を率いて集団でイスラームに改宗し、天山東部を根拠地とする彼の子と孫は中央アジアのブハラに発祥したナクシュバンディー教団の信者を宗教的指導者とし、16世紀の初頭までにこの地域を完全にイスラーム化させ、ウイグル民族の統一したアイデンティティがトルコ・イスラーム文化のもとで形成された。

このように、本来遊牧民だったウイグル人の定住化、モンゴル人の定住化とトルコ化、そして統一したウイグル人意識の形成はイスラーム化と大きく関係し、イスラーム化はまたスーフィズム（イスラーム神秘主義思想）の影響をうけた統治者の

改宗から始まり、集団改宗をするといった特徴があった。ここから、この地域におけるイスラーム化は政治目的で始められたことが分かる。これはその後の東トルキスタン社会にも影を落とした。1513年、トゥグルク・テムルの孫サイドが天山山脈南部のカシュガル地域にカシュガル・ハン国（後に遷都したためヤルカンド・ハン国）を建国し、最盛期に同族が支配した東部のトルファン、ハミ地域も併合し、その支配領域は当時のウイグル人居住地域と完全に一致した。しかし、物理的に各オアシスが独立する状態になりやすいこともあり、とくにスーフィーたちによる政治への干渉で、ハンの力は弱まっていった。

16世紀末期から17世紀半ばまで、ナクシュバンディー教団のイスハーキーヤ派とイーシャーニーヤ派が相次いでウイグル社会に入り、それぞれヤルカンド地域とカシュガル地域を中心に「黒山党」と「白山党」（信者が頭に黒いまたは白いターバンを纏う）を形成した。その指導者がホージャ（預言者ムハンマドの後裔）と自称するため、またヤルカンド・ホージャ家およびカシュガル・ホージャ家とも呼ばれた。両ホージャ家は政治権力と癒着し、激しい抗争を展開した。天山北部の新興モンゴル系遊牧王朝ジュンガル・ハン国は白山党ホージャの要請を受けて、1678年に南部のヤルカンド・ハン国を滅ぼした。18世紀中頃に清朝がジュンガルを侵攻し、反旗を翻した白山派のホージャも鎮圧された。清朝は「新しく開いた領土」という意味で、天山南北を併せて「新疆」と呼んだ。

乾隆帝は新疆を内地の「省」と異なる軍事自治領——「藩部」とし、伊犁将軍が駐屯軍を指揮し、最高民政長官でもある。各地の駐在大臣をすべて満洲人かモンゴル人を以て任命し、ウイグル社会の民政に当たってベグ制を敷いた。トルコ語の「ベグ Beg」とは指導者・有力者であり、ベグ制は元来の有力者にウイグル社会の統治を任せ、民族の自治をある程度認める制度である。なかで注目すべきは、ウイグル人と漢人との交流、中国文化の受け入れを厳禁する政策である。官印にも漢字を使わず、漢人部隊を駐屯期間限定の換防兵にし、特殊な硬貨を鑄造して以て内地との経済交流を阻み、内地から来た商人の活動範囲をウイグル社会以外に制限した。ちなみに、同じ藩部とされたのはまたチベットとモンゴル地域があり、清朝崩壊後揃って中国からの独立を主張する地域である。

藩部は内地の漢人を牽制する上でも重要であったため、清朝は様々な方法でウイグル人の反抗を防ごうとした。最も重要なのは、駐在大臣による監視と徹底した政教分離である。清朝はウラマーがウイグル人の精神的指導者として文化教育事業を掌握する現状を容認し、ムスリムとしての日常的活動を許したが、教団の集団礼拝を禁止し、ホージャ家の権力と権威を厳しく制限し、アホンのベグ登用とベグのアホン兼職も禁止された。



コーカンド将軍ヤクブ・ベグ

ところで、1820年から57年まで、コーカンドに亡命したカシュガル・ホージャがウイグル社会支配の回復を目指して「ジハード」を8回起こした。なかに最も有名なのは「ホージャ・ジハンギールの乱」であり、ジハードは現地のウイグル人の支持を得た。ホージャへの崇敬だけではなく、大臣とベグの腐敗が招いた清朝支配の威信低下も見落とせない要因である。1864年に中国内地の「西北回乱」の影響を受けて新疆各地でムスリム蜂起が相次ぎ、清朝の新疆支配体制は完全に崩壊した。65年初頭、軍司令官としてホージャとともにカシュガルにやって来たコーカンド将軍ヤクブ・ベグは、ウイグル地域に残留した清朝軍を一掃した後、各オアシスの有力者を次々と殺害し、自ら「七城政権」を樹立した。支配維持のため、彼は進出してきたロシアとイギリス勢力とも接触し、軍事援助の代わりに自由通商権・居住権・最恵国待遇と治外法権を与えた。厳しい国際

環境の中でもはや漢人をけん制するという対内的観点だけで新疆問題を考える余裕がなくなり、大きな脅威を感じた清朝は 1876 年に「新疆収復」戦争を執行した。ここでベグ制を廃止し、84 年に中国内地と同様に省制が導入された。



東トルキスタン・イスラーム共和国政府
樹立会議

「新疆省」の設置とともに、ウイグルに対する同化政策が始まり、漢人の入植も積極的に推進されるようになった。そこから漢人が新疆の官僚になり、漢民族が支配者としてウイグル社会に君臨するという社会、文化と政治的構図がずっと続いた。この民族差別的な社会構造に対し、19 世紀末に近代ウイグル文化啓蒙運動が始まり、その延長線上に 1930 年代に東トルキスタン独立運動が勃発し、33 年 11 月 12 日に天山南部のカシュガルで東トルキスタン・イスラーム共和国政府が樹立された。

1930 年代に新疆はさらに国際政治の要と化し、ソ連が漢人独裁者盛世才への支援を通じて「新疆省」の政治を実質的に握った。日本陸軍大学校卒の盛は三回も大規模な政治粛清を起こして政敵を追い出し、東トルキスタン独立派をはじめ、多くの民族エリートを殺害した。

1944 年に盛世才との反目をきっかけに、ソ連が支援した第二次東トルキスタン独立運動が勃発し、天山北部のソ連国境に近いクルジャで東トルキスタン共和国政府が樹立された。政府主席はウズベク人のウラマーであるが、軍



飛行機「事故」で亡くなった最高指導者
エホメッドジャン・カスミ

と内政部や宣伝部などの要職はみなソ連の指図を受けるウイグル人によって占められた。独立勢力は一時新疆省都ウルムチの近郊まで迫ったが、第二次世界大戦の終戦期にソ連が国際政治政策を転換したため、独立派はソ連の指示でやむなく中華民国政府が主導する新疆省連合政府に入った。連合政府は間もなく分裂し、独立派はイリ・アルタイ・タルバハタイの 3 区を自ら支配し、後にソ連の指示で中国共産党に合流した。ソ連の力を利用したい毛沢東は 3 区が中国革命の一部だと賛辞を送ったが、独立運動勢力を信用しなかった。運動の指導者たちも 1949 年に中共主催の新政治協商会議に出席するために北京へ向かう途中、ソ連の領空で飛行機が墜落し全員死亡した。



盛世才

中共軍を率いて新疆に入ってきた王震將軍は少数民族住民の抵抗を徹底的に鎮圧し、盛世才と同様に幼児を泣き止ませる鬼に喩えられる悪名を残した。1955 年 10 月 1 日に新疆省がウイグル自治区となり、行政の長—自治区政府主席はウイグル人であるが、事実上のトップである共産党書記はほとんど漢人であった。1949 年に総人口の 75.94% を占めていたウイグル住民の割合は、2010 年時に



軍を率いて新疆に入ってきた王震將軍

46.16%まで低下し、他方で1949年時に総人口の6.7%に過ぎなかった漢人住民は2010年に40.1%を占めるようになった。1954年に設立した新疆生産建設兵団人口における漢人の比例はさらに高い。軍と経済組織の性格を兼ねる兵団を設立した目的は、現地の少数民族住民による抵抗を鎮圧することでもあったが、土地や草原、特に水などの資源を巡って、兵団は少数民族原住民との衝突を繰り返した。

1959年に中国政府は天山東部にあるローブノールを核実験の試験場とし、96年までに数十回の核実験を行い、人口増加の原因もあり、天山南部の自然環境が次第に悪化した。2000年からの「西部開発」以降、漢人の流入がさらに激しくなり、水不足と原生林の消滅による砂漠化など、環境悪化は著しくなった。石油と天然ガス埋蔵量がそれぞれ全国の25.45%と28%を占める新疆は中国の経済成長を支えたが、内地との経済格差、そして地域内の漢人と少数民族との経済格差はむしろさらに拡大した。経済格差と社会的、政治的民族差別に反発し、2009年7月5日にウラムチでウイグル人による大規模な暴動が起こった。

1962年に6.7万人のウイグル人とカザフ人が旧ソ連に一斉に移住する「イリ事件」をはじめ、90年の「バリン郷暴動」と97年の「イリ暴動」など、毛沢東時代



バリン郷暴動鎮圧に参加する兵団の民兵

からウイグル人による反発がたびたび発生したが、その治世を自画自賛するために中共はほとんど公表しなかった。しかし2001年アメリカ同時多発テロ事件以降、中共政権は反テロの口実でウイグル人に対する弾圧をさらに強めた。高等教育における民族言語の使用が禁止され、イスラーム教育が取締りの対象となり、ラマダンなどの宗教行事も妨害された。習近平政権が誕生してから、「一帯一路」の西玄関口の新疆では、テロ防止の名で警察が大量に増員され、24時間全方位カメラ監

視システムが導入され、ウイグル人やカザフ人に対する民族的差別が一層明らかなものとなった。海外家族との連絡の報告義務化、地域内の移動も制限され、携帯電話が随時随所でチェックされ、ややもすれば拘束され、百万人以上のウイグル人が拘束されたとも言われている。本来トルコ系住民の故郷である東トルキスタンは、一党独裁政権のもとで、ウイグル人をはじめ、諸トルコ系イスラーム民族の生地獄と化しつつある。

7.5事件の弾圧に抗議するウイグル人女性



「再教育キャンプ」に拘束されたウイグル人